

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 特別選考入学試験問題 【小論文】【国語教育専攻】

解答上の注意

- 一. 解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。
- 二. 無解答の解答用紙でも提出すること。
- 三. 問題用紙は「三枚」（本ページ含む）、解答用紙は「一枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 特別選考入学試験問題
【小論文】 【国語教育専攻】

問題

次に示すのは丹藤博文著『ナラティブ・リテラシー——読書行為としての語り』（溪水社、二〇一八・四）に収録された、丹藤氏の「物語としての説明文」と題する論文の一節（冒頭に省略した箇所がある）である。この文章を
読んで、後の問いに答えなさい。

文学的なテクストを読む

うえで、作者ではなく語り手という虚構上の主体を想定することは必須である。作者と語り手が分裂していることが、テクストを読むうえでの条件であった。説明文においても、筆者ではなく語り手とすべきである。理論的には、世界は言語化されており、言語化されているということは物語化されることであって、物語である以上、語り手を想定できる。また、テクストは、たいてい事後的に書かれたものであり、書くことと書かれることの間には時間的なギャップは不可避である。書かれるものやことは、書くことによつて忠実に再現されるのではなく、変形や編集を免れない。語りによつて新たに制作されるという点では文学テクストと変わらない。ただしに、テクスト外の筆者に還元するより、テクスト内で語り手がどのように語るかの方略や力学に目を向けることの方が、はるかに生産的である。

高校一年の定番教材である山崎正和『水の東西』で見ていくことにしよう。本文は、『国語総合』（教育出版、二〇一六年）に拠る。ちなみに、本教科書では、「評論」の扱いである。

高等学校の一年生の教材として長く採用される理由は何か。教材としての意図は、「学習の手引き」に明らかである。

- 1 筆者は「鹿おとし」と「噴水」とを、それぞれのようなものとして捉えているか。本文中の対句表現をふまえながら、まとめてみよう。
- 2 「そういう思想はむしろ思想以前の感性によつて裏づけられていた。」とはどういうことか、まとめてみよう。
- 3 なぜ、鹿おとしが「日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛け」だといえるのか、まとめてみよう。
(傍線は丹藤。以下同じ)

「鹿おとし」と「噴水」といった「対句表現」から、日本と西洋という二項対立を読むことに主眼が置かれるのである。実際本文において、次のように明確に表記されている。

流れる水と、噴き上げる水。

時間的な水と、空間的な水。

見えない水と、目に見える水。

本教材が、西洋と日本という二項対立に終わっているかという点、もちろんそんなことはない。「手引き」3「が問うているように、日本独自の文化を礼賛したのである。しかし、その具体的な根拠が、明示されることはない。語り手の主観および語り方によつて、そのことを達成しようとしている。『行雲流水』という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によつて裏づけられていた」とされる。しかし、思想以前の感性によつて裏づけられているのは、日本というより、むしろ語り手である。

冒頭「鹿おとし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、なんとなく人生のけだるさのようなものを感じる「鹿おとし」が始まる。「感じる」という叙述からも知れるように、「鹿おとし」を「愛嬌」があるものとし、「人生のけだるさのようなものを感じる」とする見方もまったく主観的なものであり、誰しもそのように「感じる」とは限らない。続けて「くぐもった優しい音をたてる」というのも、個人の主観の域を出るものではない。「私はこの『鹿おとし』を、ニューヨーク

修士課程 特別選考入学試験問題

「小論文」 「国語教育専攻」

の大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あの素朴な竹の響きが西洋人の心を魅きつけたのかもしれない」となる。「西洋人の心を魅きつけた」かどうかはわからないから、さすがに「かもしれない」という推量表現となる。そして、「噴水」との比較がなされる。「噴水」は、日本にもあるが、「日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない」と否定される。しかし、「おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みをもっていたのである」と、日本の独自性が「おそらく」と、また推量表現により判断される。

もし、流れを感じることでだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのにもはや水を見る必要さえないといえる。

いつのまにか「我々」とされていることに注意が必要である。冒頭の「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある」のは個人の主観であるが、結論部にいたって読者は「我々」として、「日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛け」であることに共感する、あるいは納得するよう仕掛けられているのである。

このテキストは、評論というジャンルに分類されているが、「事実」ではなく「主観」によって成り立っている。しかも、結論に対する根拠や証拠が示されることはなく、「かもしれない」「おそらく」といった推量がなされるばかりである。推量の結果、「いえる」と断定される。西洋と日本という二項対立は、「正義」と「悪」、「ヒーロー」と「ヒロイン」といったように物語にはおなじみの図式である。二項対立は、世の中にあふれているが、それだけに危うい要素をもっている。「男/女」という二項対立は、ホモセクシャルの人には受け容れ難い図式だろう。「都会/田舎」の境界はけっして自明なものではない。二項対立とは、立場によっては暴力的ですらある。物語は虚構として受け取られることを前提とするが、ここでは、「流れる水と、噴き上げる水」というように、あたかも「事実」であるかのように語られ、「日本/西洋」の「対比」というように実体化される。先に述べたように、二項対立が目的なのではない。日本の文化や美意識の独自性を、西洋に負けず劣らず優れたものであることを言いたいのである。そして、「我々は」という複数形を用いることで、読者も同じ認識に立つことを語り手は求めているのである。西洋に対する日本の独自性もしくは優位性という認識を共有することが、このテキストの欲望であり行為性であろう。

このテキストが、日本文化の優位性を言い、語り手がそのことを戦略的に伝えようとしていること自体を批判しようとしているのではない。あらゆるテキストは、読者に受け容れてほしいという欲望を持つであろうし、語り手はそのために機能するはずである。むしろ、テキストの語りや表現の方略を見ていくことによって、読者にどのように機能し行為化しようとしているのかを可視化することが、「説明文」においても必要であろう。イタイコトは、テキストの方略と一体なのである。要約・要点・要旨といった説明文読解三点セットは、抽象化には向かうものの、テキストの方略を見逃してしまっているのではないか。筆者のイタイコトが実体的に存在するという固定観念から解放されて、筆者ではなく語り手を想定して、テキストの内容と形式（方略）との相関を読むことが説明文の読みにも求められている。

問一 山崎正和の「水の東西」における教材の特質を、筆者はどのように捉えているか。またその捉え方をもとにして、説明文の読みに必要なことをどのように考えているか、分かりやすく説明しなさい。説明に際しては、単に筆者のことばを引用するのではなく、「自身のことばを用いて論述するように心がけてください。」

問二 貴方の考える「説明文」の効果的な学習指導について、具体的な教材を挙げて詳しく論述しなさい。論述に際しては、関連する先行研究にも言及してください。

《注意》 解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。解答用紙に「問一」「問二」と書いてから、それぞれの解答を記入してください。解答用紙は裏面も使用できます。